ペスタロッチー「幼児教育の書簡」に関する一考察

尾　上　明　子

はじめに

ペスタロッチー(Johann Heinrich, Pestalozzi; 1746～1827)は、いうまでもなく幼稚園の創始者F・フレーベルに多大な影響を与えた人物である。フレーベルは、ペスタロッチーのもとで約二年間、半ば生徒として、半ば教師として滞在し学んでいる。

一般に、ペスタロッチーは、幼児教育の思想家・実践家というより、初等教育・国民教育という幅広い視野で捉えるほうがよいということは良く知られているところである。そのため、ペスタロッチーという巨人について研究するためには、偉大な功績とともにその膨大な著作を熟知していなければならないが、現在の私にとっては、あまりに手に余るものがある。

ペスタロッチーの幼児教育に関する著作は、三歳の息子ヤーコプについての「育児日記」(1774年)、直接的ではないが彼の教育学の出発点であり帰結点である「隠者の夕暮れ」(1780年)、教育小説「リーンハルトとゲルトルート」(1781～1787年)、「立法と嬰児殺し」(1780年)「メトーデ」(1800年)、「ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか」(1801年)などがあるが晩年、幼い子どもへの想い・母親への願いなど彼の幼児教育への思いを「幼児教育の書簡」(1818年;Letters on Early Education, addressed to J.P. Greaves, ESQ. by Pestalozzi)において結実させている。これは、まさにペスタロッチー幼児教育学の集大成と言えるものではないかと考える。

ドイツの幼児教育や保母養成期間では、ペスタロッチーとフレーベルは、いわば一対のように考えられていると言う。すなわち、ペスタロッチーの社会教育の理念と児童中心のフレーベルの学説を取り入れていくという方法である。

今研究は、ペスタロッチーの幼児教育のエッセンスである「幼児教育の書簡」から、彼の幼児教育と母親への願いなどを読み取り、今日におけるキリスト教保育への示唆となるものを取り上げてみたい。

1 「幼児教育の書簡」について

本著は、イギリスのグリーブス(Greaves, J.P.; 1777～1842)から依頼され、書簡形式で書かれたペスタロッチーの幼児教育論である。

グリーブスは、ロンドンで父譲りの店を手広く経営していた商人であるが、30歳の時、ナポレオン一世の経済封鎖のあおりを受け、経営不振に陥ったのを機に店を閉じ、それ以後は、スウェーデンの神秘主義者スウェーデンボルグの哲学などに親しむ生活を送っていた。スウェーデンボルグの考え方の中でペスタロッチーとの接点をすでに見出していた彼は、ペスタロッチーを知ることによって彼の教育実践と理想に感動し、スイスに馳せ参じるのである。

1818年、彼はペスタロッチーが校長を努めるクリンディーの貧民学校とイヴェルドンの学校とに都合約4年間滞在し、英語の指導を買ってでた。彼は、ペスタロッチーの教育をなんとしてもイギリスに普及させなければと考え、時のイギリス首相リヴァプール卿に、イヴェルドンにイギリス人留学生派遣を求める書状を出している。これについては、実現できなかったが、彼はついにペスタロッチー自身を動かすことに成功し、彼宛の書簡形式でイギリスの母親のための教育思想を要約させることを約束させたのである。これが「幼児教育の書簡」となって世に送り出されたわけである。

尚、この書簡は、第一信1818年10月1日付けから第三十四信1919年5月12日付けまでとなっており、月に4～6信の割合で書かれていることになっている。実際にそのようであったかどうか定かではないが、この通りであるとすると、72歳という高齢で精力的な執筆を成し、それまでのペスタロッチーの情熱的な生き様を垣間見ること

ができる。以下、7信毎の要点をまとめてみたい。参考までに「幼児教育の書簡」訳者によるポイントを以下列挙してみる。

第1信　幼児精神の発達には、母親の助力が不可欠である
第2信　母親には、わが子の発達の差配者となる資格が造物主から授けられている
第3信　幼児期に示される人間性の最初の諸兆候
第4信　母親は、人生の多様な相全般を概観すべきである
第5信　人間の諸能力すべてが開発されなくてはならない
第6信　愛と信仰の力は、子どもにも完全に発達させられている
第7信　幼児に対する親切が、かれの発達にとって最も効果的である
第8信　他人の方針は、自分の心が同意する場合にのみ受け入れよ
第9信　幼児と動物との異同
第10信　人間の最初の状態の考察
第11信　動物本能は自己保存を最高目的とし、刹那的満足のみを追及する
第12信　心身の健全状態には、望みが少なく、しかも全部かなえられなくても満足できることが肝要である
第13信　動物本能以上の幼児本姓は、母性愛によってできるだけ早く鼓舞されなければならない
第14信　母親に対する幼児の情愛と信頼は、助長・強化・向上させられなければならない
第15信　母親に対する子どもの情愛は、母親にいっそう母親としての自覚をうながす
第16信　最も有益な克己の習慣を幼児につけさせるには、母親自身がそれを身につけていなければならない
第17信　母親は、自分自身の弱さをつねに警戒していなければならない
第18信　母親との幼児の直接的な結びつきは、いずれゆるみ出す
第19信　子どもは、はじめて一人で歩き出したときから情愛を新たな様式で示すようになる
第20信　子どもは、知的および道徳的自立感をも抱くようになる
第21信　教育では、子どもが既に何を持っているかがまず考えられなくてはならない
第22信　体育は、道徳的にもきわめて有効である
第23信　音楽も道徳教育にきわめて有効である
第24信　図画・模型作り・幾何・地理
第25信　教育の真の改善は、母親の教育から着手されなければならない
第26信　無教育な母親にも、わが子のためにしてやれることが多数ある
第27信　女性教育で大切なのは、思慕分別と感情との調和をはからせることである
第28信　知識は事物によって教えられなければならない
第29信　思考訓練の要諦は、子どもと会話することである
第30信　教師や母親は、何よりも子どもの興味を尊重しなければならない
第31信　直感の基礎としての数・形・語
第32信　教育の個人的・社会的目的
第33信　母親の教授は、子どもを信仰と愛に導けるように計画されていなければならない
第34信　人間教育の完成がキリスト教の究極目標である

2　内容の要約

ここで、訳者のポイントを参考にしながらも、ペスタロッチー自身の言葉に注意し、要点をまとめていきたい。

①[第1信～第6信まで]

第一信：人生の最初の時期の教育についての重要性を認識することの必要性。そのことを母親自身が自覚すること。

第二信：母親にはこの大事業に参加する資格があるということ。この資格は、造物主（注：訳者は創造主とも現している。以後創造主と統一する）から備えられている。母性愛ほどの影響の強い刺激的な力は他にない。その力は、自然の秩序全体の中の最もやさしく大胆な力である。母親は、その力を道理をわきまえた愛、すなわち自分の愛をできるだけ強く働かせながら、行動の際に

思考によって調整してもらいたい。人間の社会における仕事のなかで、どんな仕事が最も神聖で最も厳粛なものか。それは、人間性の精神的向上に生涯が捧げられている人の仕事。自分の仕事が他人を幸福にし、しかも永遠の幸福に導けるならばなんと幸せなことか。

第三信：子どもには、人間性のあらゆる能力が賦与されている。しかし、そのいずれもまだ発達していない。つまり蕾の状態にある。その蕾が開く過程が教育でなければならない。子どもの小さな手の最初の働きは、その後の能力を切り開く力である。母親は、そのような兆候を書物からではなく子どもを観察することによって学ぶ。

第四信：その兆候を認めた母親は、わが子に今、どのように指導したらよいかという問題に当たる。その時、最も懸命に注意を払わなければならないことは何か、自然の過程に任せておいてよいことは何か、子どもの将来に最も重大な関係を持っていることは何か。

このような問題の全体をすべての母親が概観することを望む。人生が過誤の迷路であること。外観は活発だが生命が絶えて死んでいることなど。そのような中から、真理の源泉に通じる魔法の糸を示し、子どもが変化なく怠惰な常習的機構の中に埋もれている時に、そこから引き上げるように促すことが重要。ただ生まれて死んだ、人間性を高める行為を何もせずに一生を送った、このような人生をあなたは望まないでしょう。

第五信：「神は、私たちの本性に備わる全能力をあなたの子どもに与えられました。しかし、重大な問題がまだ解決されていません。子どもの心と頭と両手がどのように使用されたらよいのでしょうか。それらが誰のために捧げられたらよいのでしょうか。このような、解答いかんがあなたのいとし子の以後の人生における幸不幸にかかわる問題が、まだ解決されていないのです」。「神は、精神的本性をあなたの子どもに与えられました。神がかれの中に良心の声を吹き込まれたのです。さらに、神はそれ以上のことをなさいました。—神の声に耳を傾ける能力をかれに与えられたのです。独りでに天に向けられる目を、かれに与えられたのです。—目を天に向けるだけで子どもの運命がかならず開けることを、あなたに悟らせられているのです。そして、そのうつ向き加減に向かう方向がはっきりと示されている下等生物に、子どもがいささかも類似することがないようにされているのです」。

子どもは地の子としてだけではなく、天の子としても創造されていることを認識し、その道に至る方法を子ども自身が見つけ出すことができるように。

「登るのに必要な諸力のいずれもが、すでに与えられています。しかし、それらの諸力を引き出す際に助力を与えることは、あなたの職分です。天に通じる梯子を、いつもあなたの目の前に置かせてください。希望と愛の天使たちの昇降があなたに見える信仰という梯子を」。

第六信：子どもに（幼児にさえ）愛と信仰の力があることは明白である。その能力は、一般的に軽んじられてきたことを知っている。しかし、この能力を私は、神の素晴らしい配列と見なしている。それは、純真で正しい神聖な力によって、大事に育てられなければならないし、子どもの生活環境が構成されなければならない。本能的なものを第1の本性と言うならば、愛と信仰は第2の本性と成り得る。

②[第7信～第13信]

第七信：教育に携わる者は、子どもを親切に扱うことが大切であり、そのようにすることが最も本性に適している。子どもは、創造主によって、そのような素質を与えられているからである。

第八信：母親に対し言いたいことは、自分が耳にし得る他人の意見を検討する際、あなたの心の同意、つまり良心に従って常に判断し良心が正当と認めた場合、その意見に従って欲しいということ。

第九信：動物は、その本性の本能に従うように創造主から、運命づけられている。人間の動物的本性は、精神的本性が発現し始めると、その能力だけに支配されなくなる。

第十信：人間の最初の状態ぐらい身体的に無力で、能力的に貧弱なものは無い。しかし、それでも私は、屈辱的なものを見出すことはできない。

第十一信：動物本能の本質は、自己以上に対象を知らないということ。自己保存が動物本能の最高の目的。人間の精神的本性を最もはっきりと示

す事実は、他人の幸福のために自分の慰安や娯楽を犠牲にするという事実。個人の欲望より高級な目的に従わせるということ。

第十二信：子どもは、動物本能に支配されているということに自覚がない。しかし、より上の精神的兆候が現れると、自己の良心との戦いが始まる。母親はこの時、子どもの意のままにさせるのではなく、子どもの真の幸福のために賢明な判断をしなければならない。子どもにとって望みが全てかなえられなくても、満足できることが重要である。

第十三信：幼児のより高級な本性が、人間の下級本性の基礎とされる動物本能の旺盛な勢力と抗争するために、できるだけ早く鼓舞されなければならない。動物本能は、幼児の生活において、日増しに強くなる。知覚できるすべての事物を捕まえようとし、好奇心のそそるものすべてが欲望を刺激する。通常、激情は節操によって静められ、欲望は理性によって統制されるべきだと言われているが、そのいずれにも訴えられない時期を母性愛で埋め合わせるよう神の摂理が働いている。有名な著述家が「恐怖」と「畏敬」が子どもの精神に最初に有効で、愛と信仰はもっと後に作用すべきと言っているが、「恐怖」は、直ちに止めるべきだし、「畏敬」感は、まだ未成熟であることから、しばらくは棚上げにしておく方がよい。

③[第14信～第20信]

第十四信：母親がはじめて権威を及ぼす際は、すべての手段が自分の良心と経験とに容認されるように十分注意することが必要である。権威（推理力）に対する盲従から出る一連の活動とそれ以外のもの（情愛）から出る行動との差異をすべての母親に注意してもらいたい。権威は、直接的原因がなくなると消滅してしまうかもしれない。情愛は、状況や偶然の理由にではなく道徳的で堅実な方針に基づいているので永続する。母親のまず果さなければならない本分は、子どもに情愛と信頼とが心に一度根付いたら、その素質を助長し強化し向上させるために全力を注ぐことである。

第十五信：知識を蓄えたり知性を啓発すること、正しい道徳的信条を持つこと、趣味を持つことが望ましいとするならば、心の情愛を指導純化･向上させることが必要。しかもその信条に従うことは、いつからでも早すぎることは無い。子どもたちの母親に対する早期の情愛が、母親に一層の自覚を促すのである。

第十六信：母親は、子どもに発達させるべき精神的な愛と信仰の萌芽を、まず自分自身に根付かせることでなければならない。一度だけは、自分の思うままにしてみてもよいが、立ち止まり内省することが大切。母親の確実で絶対的な基準は、克己の習慣を子どもに身に付けさせられるかどうかにかかっている。私は、克己は習慣だと思う。

第十七信：注意深い世話や機嫌よく世話をすること、子どもの真の要求を見落とさないこと、全力投球することなどと共に、彼女自身の弱さを常に警戒していること。これらの欠落が子どもに不安感を抱かせる要因となることがある。弱さを真の情愛と混同してはいけない。真の情愛は、全く違うもの。罰という恐怖に訴えることは、事態を悪くさせるだけである。恐怖がもたらす結果は、甘やかしがもたらす結果と同様に有害である。

第十八信：母親は、子どもが彼女の下を離れる時期に対していつも不安を持っている。子どもの身体的自立が進むにつれ、感覚と能力とを上手に使うことができるにつれ、子どもの情愛が母親だけに注がれることが少なくなっていく。

第十九信：子どもの自立への一歩は、自分の力で歩き出し、手を伸ばし何か目的を達しようとすること。子どもを取り囲む環境によって、毎日あらゆる能力が発動されている。

第二十信：子どもの自立は、先に述べた身体的な自立のみではなく、知的および道徳的な自立もある。それは、子どもの質問によって現されている。それらははじめほとんど意味がない。しかし、ある年齢に達すると、幼児を取り巻くあらゆる事物が思考を促す手段となりうるのである。そして、母親の親しい人物からも、母親がそれらの人々へ示すあらゆることから、情愛と信頼を学び始める。子どもは、真理に盲目ではなく、虚偽を見抜く純粋な感覚を持っている。

④[第21信～第27信]

第二十一信：教育の究極目標は、学校の成績を大いに上げることではなく、生活に適応できるようにすること、自主的に活動できるようにすること、子どもが持っているすべての能力を発達させ

る機会を与えることである。人間を最高に満足させるのは、自らを有用な人間にする抜群の適性があるという自覚（自分の助言や助力が、それがなかったら与えられなかった便宜を他人に与えられて嬉しくなった経験）を持つこと。

だから、教育では、子どもたちに伝えられなければならないものだけを考えるのではなく、すでに何を持っているかを考えるべきである。また、子どもをどのようにできるかを判定するよりも、彼の適性を探求することが重要ではないだろうか。

第二十二信：体育は、人間の発達にとって重要であり、母親は体育原理に精通して、初歩的基礎的な運動に中から、自分の子どもに最適と思われることを状況に応じて選択できるようになるとよい。また、体育が身体に対する効果が大きいのと同じように、体育が道徳的効果も大きいと強調したい。それは、快活と健康であり、共同精神と仲間意識とを醸し出すのである。

第二十三信：音楽は感情に顕著でこの上なく有益な影響を及ぼす。それは、心の調律に最も有益である。正しく培われた音楽的感情は、邪悪あるいは狭量な感情、卑劣あるいは下劣な性癖、非人間的感情に一撃をくらわせる。それは、かのルターも言っている。

第二十四信：子どもが模倣の欲求と試みをすることは、言葉や耳と発音器官については言うまでもないが、更に目と手の使用が重要である。初歩的な絵のようなものを描くことは、子どもにとって有益である。それは、私の学校の教師たちの方法でも証明されている。その際、陰影と遠近法の初歩的原理を与えることが容易になり、安易に手伝いをし、発明の才を発揮できる余地を残さないようではいけない。

次は、模型を作る練習で、これはしばしば描画より楽しいものとなる。他は、幾何と地理である。

第二十五信：民衆への教育、すなわち学校改革に真剣に取り組んできたが、それ以上に大切なのは一家の団欒である。次代の幸福を願うならば、それは母親の教育を最高の目的とせざるを得ないのである。

第二十六信：いろいろな事情で教育から全く遠ざけられていた母親、若くて経験の乏しい母親にもわが子に出来ることは沢山ある。母性愛は、創造主の惜しみない賜物である。

第二十七信：女性の特性が、幼児教育に顕著な役割を演じられるように発達させられるような学校が必要である。自分の本分を自覚した女性を徹底的に観察することから、その徳性を見出すこと。道徳的尊厳を備えた人格、柔和な物腰、確固不動の信条とともに、感情がほどよく混合していることは賞賛に値することである。慎み深さが知識の堅実さを保証し、繊細さが感情の見当違いを防ぐようになることが望ましい。

⑤[第28信～第34信]

第二十八信：わが子の知的教育に積極的役割を果したいと考えるならば、まず知識の種類の検討をし、子どもへの与え方を研究する必要がある。例えば、言葉は正しく理解されると知識になるが、言葉が記憶されたから知識が習得されたと考えることは通俗的誤信である。特に、知性が芽生えたばかりで、それぞれの異なる個体について理解できない時に、記憶力だけを刺激される方法を適用することは極めて有害であろう。この弊害を無くすには第一に、言葉によってではなく、事物によって教えることが重要である。事物によって教えるにしても、事物の特性や生成を明らかにし、部分が指摘され部分と全体との関係が確かめられなくてはならない。事物の用途と効用、重要性が語られなければならない。子どもの前に実際に示すことが出来ない場合、絵を採用すること。これは、子どもの好奇心に上手く指導されれば有効かつ教育的なものとなる。

第二十九信：第二に、子どもを知的教育の客体ではなく主体にすること。読み書きや反復すること以上に、思考させることがもっと大切だ。

内省の習慣は、人を無思慮な行動に走らせず、謙虚さ、すなわち自分は僅かしか知ってないということ、しかし僅かなことでもよく知っているという自覚などを持たせ、思考する習慣へと導くかもしれない。

母親に思考力を発達させるのに良い方法はと聞かれれば、子どもの能力に適した方法であれば何でも良いと応えるでしょう。その際、子どもに対して多くを語るのではなく、子どもの会話に参加することが重要である。

第三十信：学習への動機付けは、恐怖の中で行われるべきものではなく、興味を喚起させること。子どもたちが怠慢で勉強に興味がないように見える場合、まず教師が自分の側に原因があると考えることを原則にしたい。特に教育に携わる者、学校の教師は、弱い者への暴君になっているということを看過してきた。質問で生気を与えられ、実例で活気づけられ、優しさで興味をかきたてられる教授法を追及していかなければならない。

第三十一信：数と形のそれぞれの相互関係、量あるいは大きさが、外界から与えられる自然の尺度になっている。数の初歩は、抽象的な観念からではなく、具体的な事物を通して教えられなければならない。そのように学んだ子どもたちの強みは第一に、自分が何をしているかということだけでなく、なぜそうしているかの原理が解っていた。第二は、実物で用いる初歩の訓練を受けた子どもたちは、後に暗算が非常に得意になったということ。形の初歩のための活動は、過去の方法を修正発展させた。すなわち、事実を理論から解明する代わりに、問題から導出する方法、事実の存在を論評するだけでなく、その起源を説明する方法、他人の発見をうのみにさせず、頭を使って自ら発見させる方法などである。

また自分の国語を完全に習得することにおいての指導は、慎重に進められなければならない。

第三十二信：教育の高次の目的は、人間を創造主から賦与された全能力を自由にしかも完全に使用できるようにすること。その力を、全知全能への奉仕として、それぞれの持ち場で発揮できるようにすること。言い換えれば、各人が創造者との関係に目を向けさせること。社会との関係からは、人間は教育によって有用な一員にさせられるべきである。また、個人として見るならば、教育は個人の幸福に寄与すべきである。幸福感は、精神が内外の世界の調和を自覚している状態。幸福な人とは、欲望を自分相応な程度に抑制することができ、個人的利己的願望を満足と平静さとを犠牲にすることなく断念できる人である。

第三十三信：教育への動機がしばしば、野心や恐怖からくることは避けなければならない。幼児に備わっている母親を愛し信頼する感情が最初の基礎となることによって、動物的な本能的な自己の欲求充足を追及する衝動から免れることができるようになることを母親たちに強調したい。母性愛は教育における第一の原動力である。しかし、母性愛は、人間の感情の中で最も純粋であるにしても、人間的なもの。母親の模範や教え方が、あらかじめ愛と信仰とに導けるよう計画されてない限り、必ずしも子どものためになるとは限らない。一方、幼児の母親への愛と信頼は、人間の胸に宿る至純至高の感情であり、創造者イエスへの愛と信頼の前兆となるもの。

第三十四信：キリスト教の究極目標は、人間教育の完成にある。それは、「福音の安らかな響きに、アフリカの悲嘆は消え、しかも、奴隷と主人とが信仰で結ばれ、キリスト教の自由の中を歩み、その光の中に住む」情景としてイメージできる。

キリスト教の真理の受容の精神を次の聖書の言葉が最もよく現している。「だれでも幼な子のように神の国を受け入れ者でなければ、そこに入ることは決してできない」この言葉は、何を意味しているのだろうか。幼児が道徳的な完全を求めているとは思えない。また、知識の洗練でもない。だとすれば、母親への愛と信頼の感情以外のなにものでもないのではないだろうか。それは、信仰と類似している。極めて本能的なものであるが、どんな論法より強いのである。母親としての情愛を示す方法は、唯一つ、わが子への神の賜物を保護すること、贈与者に感謝し、彼からの賜物の増大を期待すること、わが子の萌芽の開花に全力を注ぐこと、本分に関して寛大で意志堅固で辛抱強いこと、情愛の動機を自分の心の中に求めて天恵を仰ぐことである。

この確信に基づいて、わが子を信仰に、信仰から愛に、愛から幸福に、更に純粋かつ謙虚な信仰によって、自分の幼児期の夢想を大事にしてくれた人の思い出を「思い出せ—まねよ—屈せずまねし通せ」という姿勢です。

3 考　　察

(1) 幼児観について

ペスタロッチーは、本著において、まず子どもは、人間性のあらゆる能力が与えられている蕾のような状態にあると言っている。そしてその蕾が

開く過程が教育でなければならないとしている。従って植物の蕾は、その中に全てを内包していることの象徴であり、これから花開き実を結ぶ可能性を秘めていることを現している。

次に、子どもの本性は、第一の本性と第二の本性に分け考える。第一の本性は、本能的なもの・動物的なものとし、第二の本性は、精神的なもの、すなわち愛と信仰である。これをそれぞれ、地の子（本能的なもの）と天の子（精神的なもの）という表現でも表し、神は子どもにひとりでに天に向けられる目を授けられた。幼児にさえ、それがあることは明白であると強調し、これは、神の素晴らしい配列であると見なしている。

しかし、唯子どもを賛歌しているというより、冷静にその第一の本性について述べる。子どもは自分自身が動物的本能に支配されていることの自覚がないこと。動物的本能は、日増しに強くなること。その動物的本能は、知覚できるものすべての事物を捕まえようとすることや好奇心の注がれるものすべてに欲望を持つということである。これらの本能が第二の本性より、下級のものであるから、より高級な本性によって、すなわち理性によって統制されなければならないとする。その際、後に述べる母親の役割が重要視されるのである。

ここで、今日問題となることは、おそらく本能的なものが精神的なものに劣るというように捉えられる問題であろう。ペスタロッチーの表現によれば、確かに本能的なものが精神的なものの下にあるということであるが、文脈的には、本能的な発達を認め、最初の発達の重要性が述べられており、それが自立に繋がるとしている。しかしながら、今日の発達観と比べる本能的な発達が早く陶冶されることとする彼の考え方は18世紀半ばの時代性を免れるものではない。

キリスト教保育指針においては、子ども理解において発達を次のように見ている。第一は、一人の子どもを理解するのに、その子どもを全体として理解することの必要性である。子どもは、与えられた自分の能力によって、周囲の人や物に関わりながら、自己を形成していく。これは、子どもの周囲にいるおとなや友だちとの関係の深化・拡大・変化に注意して見ることが求められる。第二は、長い人生を生きていく上で必要な能力は何かという問いから生じる問題である。能力を増すことが発達であるなら、多くの発達の頂点は青年期にあり、それ以後の人生は大した意味が無くなってしまう。ライフサイクル全体から考えるならば、向上・進歩・完成といった従来の一方方向の発達のイメージから脱却して、誕生から死までの複雑な歩みを視野にいれなければならないということ。第三に、発達を様々な能力の完成と考え、その過程を一本の道筋であると見なすと発達の段階は、次の高次の段階への通過点に過ぎなくなることから生じる問題である。このような理解は、子ども期は、未来に向けての発達の通過すべき時期とされ、効率よく通り過ぎることが求められ、「今、ここに」生きていることの意味が軽視される。加えて親は、子どもに「人並み」あるいは「それ以上」先を歩んで欲しいと願う。第四に、発達の理解は、社会的・文化的・歴史的な影響に左右され、親の子どもへの期待や養育態度もその時代の社会通年に強く影響を受けることである。

以上のような、観点からペスタロッチーとの比較をするならば、先に述べたように時代性を感じるのは当然であるが、子どもの発達観において大きな問題はない。むしろ、ペスタロッチーは「今、ここに」生きる能力、生活に適応させるため、すべての能力を発達させる機会を与え、一人ひとりの子どもが何を持っているかを見極めていくことがおとなに課せられていると述べる。また、そのためのいろいろな方法論についても実践に伴い紹介している。（体育・音楽・絵・工作・幾何・地理など）

それらの発達のために最も重要なことは、子どもが自分自身で思考力を働かせていかなければならないと言うことである。すなわち、教育は子どもが客体ではなく主体にならなければならないのである。この考え方は、フレーベルが「自己活動の原理」を教育の中心的な課題とすることに至ったことに通じるものであろう。

（2）母親への教育

ペスタロッチーの時代は、子どもは家庭において、特に母親が育てることがごく普通であった。

ペスタロッチー教育学は、一般に「居間の教育」と言われるが、それほど家庭とその居間、特に母親への期待は大きくその重要性を謳っているのである。

ペスタロッチーは、母親にまず人生の最初の時期の教育の重要性を認識し、その資格を神から与えられていることを覚えておかなければならないと強調する。そして、母性愛ほど影響の強いものはないから、その愛をできるだけ、思考によって働かせ、道理をわきまえた愛として調整していくことが大切であるとする。

次に、母親は、子どもがあらゆる能力を秘めた存在であることを、子どもを観察することから学んで欲しいと述べている。ただその観察は、目の前のことだけでなく、子どもにとって何が大切なことかを見極め、問題を概観する目を養わなければならないとも言っている。

また、子どもを親切に扱うことは、子どもの本質に合った教育であると言う。親切とは、単にやさしいということではなく、心から大切にするということである。また、ペスタロッチーは、母親に、子どもの保育方針について、自分の良心と経験に基づいて、初めはある程度自分の好きなようにしても良いが、どんな賢人であっても「間違う」ということを意識していなければならないと言っている。しかし、その際、注意しなければならないことは恐怖や権威というものが、子どもを盲従させてしまうという、最も恐るべき結果をもたらしてしまうことである。そうではなく母親は、子どもに愛と信仰の萌芽が育つようにしていかなければならない。そして、その際まず自分自身がその根が根付くように祈らなければならない。また、立ち止まり内省することの大切さを説いている。自分自身の弱さを知り、その弱さが真の情愛であると間違えてはならず、子どもを混乱させてはならない。

ペスタロッチーは、母親の母性愛を理性の伴った愛として成長させていく必要を説く。そして、少し子どもが大きくなると、子どもが母親だけの情愛に頼らず、彼女の下を離れていくこと、すなわち自立について学び始めることを認識しておかなければならないとする。この自立から自律への成長に注意していることの先見性は特筆すべき点である。

最後に、特記すべきことは、女性の特性を高く評価し、幼児教育に顕著な役割を発達させられるような学校が必要であると記していることである。これは、ペスタロッチーの下で学び、世界で初めて保母養成を始めたフレーベルの実践に先立つ考え方であろう。

「キリスト教保育指針」においては、母親の役割の重要性は自明のこととしているためか、特に母親の役割や使命を取り上げることはしていない。母親は、家庭や親という言葉の中に包抱され、育児機能の低下や育児支援という視点で述べられている。もちろん、子どもを育てる営みは、母親だけが負うものではない。しかしながら、現実には母親だけが大きな負担を負っていることを考えれば、この問題をもう少し正面から取り上げ論じてみる必要があるのではないだろうか。ペスタロッチーは、母親と子どもとの関係や母親の使命を特別なものとして考えた。それは、一種のロマン主義と捉えられるところもあるかもしれない。しかし、それ以上にペスタロッチーの投げかけた母親へのメッセージを私たちは真摯に受け止める必要があるのではないだろうか。

（3）教育の目的・目標について

最後にペスタロッチーは、教育の究極の目標は人間教育の完成であるとする。それは、人間が創造主から賦与された全能力を自由にしかも完全に使用できるようにし、それぞれの持ち場で発揮できるようにすることである。

そのため各人が創造主との関係に目を向けることを願う。その際、教育によって個人が社会の有用な一員となること、そして個人が幸福でなければならないと言う。真の幸福とは、利己的欲望を満足と平静さで断念できることであるとする。

人間を最高に満足させるのは、自分が他人のために役立つことを自覚すること（自分の助言や助力がなかったら、与えられなかった他人への便宜が他人に喜ばれること）である。（1）の幼児観において述べているように、これこそが第一の本性だけでない人間の人間たる所以であるとするならば、第二の本性を持つ存在であることの自覚は、教育の中核をなすものでなければならないのではないだろうか。

おわりに

偉大な社会改革者ペスタロッチーの幼児観及び母親への教育、教育の目標・目的について考察

を試みたが、一冊の著書を要約することに終始したような感がある。不十分なことは承知しているが、ペスタロッチー教育学における幼児観を知ることができた。彼によると幼児は、創造主からあらゆる能力を与えられている未完成の「発達可能体」として捉え、蕾の中に秘められた能力を可能な限り引き出すことが母親の役割であり、教育の過程であるとした。

そのため、母親は、まず自分自身の神から与えられた母性愛という愛を自覚し、その愛をできるだけ強く働かせながら子どもを注意深く観察し、子どもの持っている力を見つける理性的な目が必要であること。子どもの心と頭と手の教育の中で最も大切な心の教育は、愛と信仰であり、母親は、まずその心を自分の中で養うように創造主に求めなければならない。なぜならば子どもは、すでに天を仰ぐ目をもち、神の声に耳を傾ける能力を持っているからである。

子どもは、母親に対して絶対の信頼を寄せるが、それは、神への信仰と類似している。それ故、母親との関係は、心（ペスタロッチーの場合、愛と信仰）の教育において最も重要なものとなる。ペスタロッチーは多くの他の教育についても言及しているがそれらのすべての帰結は、この心の教育である。この教育の完成を目指すことが、個人の幸福に繋がり、それが社会にあって有用な人間となり、人類全体が幸福になることを望んでいたと考えられる。

引用・参考文献

1 ペスタロッチ 「幼児教育の書簡」 田口仁久訳，玉川大学出版部　1983年
2 幼児教育の源流　荘司雅子 編著　明治図書　1976年
3 ペスタロッチーとその時代　村井　実　玉川大学出版部　1986年
4 キリスト教保育指針　キリスト教保育連盟　2000年
5 ペスタロッチー・フレーベル事典　玉川大学出版部　1996年

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 24, 2002

A Study on "Letters on Early Education" by Pestalozzi

Onoe, Akiko*

ペスタロッチーは、子どもを育てる営みにおいて、母親の役割を特に重要視した。母親は、まずそのことを自覚すると共に、子どもの天から与えられたあらゆる能力（蕾としてある）が開くように、自分の子どもをよく見て、何が与えられいるかを見極める目を養わなければならない。その際、母親は、母性愛を強く働かせ、その愛を理性によって調節することを覚えなければならない。子どもの頭と手と心の調和は、教育の重要な眼目であるが、その中でも最も重要なものは、心の教育である。しかし、心の教育とは、道徳教育ではない。すなわち、愛と信仰の心であり、子どもが母親への信頼を寄せることと、神への信仰は類似していると考える。それ故、教育の目標は、自分を神との関係において認識し、自分を知ることである。子どもの幼いときの第一の本性は、本能的なものであるがそれを第二の本性で抑制し、人間本来の特性である、自己を犠牲にしても他人の益のために働く人間を育てること。それこそが人間の人間たる所以であると言う。母親は、自分の心(愛と信仰)を常に内省し、祈りによってその心を求めていくことが大切である。

キーワード：*第一の本性と第二の本性，母親，愛と信仰，生活への適応*

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*